

第 18 回 2024 年度遠藤周作学会全国大会（共催 県立神奈川近代文学館）

発表要旨

研究発表

①日本におけるカトリック作家遠藤周作－「宗教的なもの」としての文学－

東京大学大学院宗教学研究室博士課程 田口哲郎

遠藤周作は日本を代表するカトリック作家である。ところで「カトリック作家」とは何であろうか。遠藤周作は世俗にありながら、カトリックを評論や文学として表現した。これは聖職者ではない世俗の作家が宗教を表現したということである。こうした特徴は、一九世紀フランスで起きた宗教の世俗化の影響を受けていると思われる。よって遠藤の紡ぎ出した言説は純粋な神学でもなく、かといって単なる世俗知でもない、「宗教的なもの」に当てはまるだろう。近代社会ではこうした「宗教的なもの」が「宗教」として受容されてきた。

カトリシズムが少数派の日本において、カトリックを主題として作家活動を行った、カトリック作家遠藤周作。遠藤の思想を当時の宗教史に再定位して、日本におけるカトリック作家の意義を考察する。遠藤は評論家として作家生活を始めたが、彼の思想が著されている「神々と神と」、「カトリック作家の問題」、「宗教と文学」など初期の評論は本論考に大いに資するだろう。

②遠藤周作『沈黙』における長崎言葉（長崎弁）の成立過程

長崎大学名誉教授 増崎英明

小説『沈黙』に頻出する長崎弁を、遠藤周作は誰に習ったのだろうか。同じく長崎が舞台である『女の一生』には、長崎弁の教示者があとがきに書かれているが、『沈黙』については不明である。今回、長崎弁の指導者（K 氏）を特定し、『沈黙』における長崎弁の成立過程（遠藤→K 氏→完成）を聞き取った。一例としてオマツのセリフの完成までを示す。

遠藤「どげん辛かろうや。辛抱なされ。（略）みなオラシヨば祈って二人がパライソ（天国）に行くと思うとるたい。」

K 氏「きつかやろうね。辛抱せんねよ。（略）みんなでオラシヨば祈りよっとよ二人がパライソ（天国）に行くやろうって思うとるさ。」

完成「きつかやろうね。辛抱するとよ。（略）みんなオラシヨば祈りよるけん、二人がパライソ（天国）に行くやろうって思うとるとよ」

小説「沈黙」では、長崎弁が小説に現実味を与え、読者を小説の世界に没入させている。遠藤は方言の重要性を知っていたのである。

③作家と文体：遠藤周作の場合

南山大学 金承哲

文学研究者を目指してフランスに留学する間に小説を書くに至った遠藤周作は、自分の小説を如何なる「技法」で書くべきかについて長い間模索していた。

欧米のキリスト教信仰を日本の精神的風土に受容することが彼の小説の「内容」である以

上、その「内容」を表現するに最も相応しい「技法」を遠藤は探し続けたのである。その結果、彼は G・グリーンや英米のハードボイルド小説から学んだ「探偵小説」という「技法」（＝ジャンル）によってものを書くことになった。ところで、その「技法」に関する問いには、自分の小説の「文体」に対する問題意識も含まれているはずである。「文体」とは、作家の抱く観念を具象化し、その作家ならではの文学世界を構築させるものだからである。本発表では、遠藤の作品がもつ「文体」をテーマにすることにより、遠藤文学を理解してみたい。

シンポジウム

小説家、遠藤周作の誕生

ーフランス留学から文壇での地位の確立まで（一九五〇年代、二七歳～三四歳）

〈パネリスト〉 太原正裕・神谷光信・飯島洋 〈コーディネーター・司会〉 北田雄一

今回のシンポジウムは、遠藤周作の文学的生涯を時代に開いていく第二回として、一九五〇年から五五年、フランス留学から帰国後、「アデンまで」で小説家活動を始めるとともにメタフィジック批評などの活動も旺盛であった時期に焦点をあてる」という予定だったが、時期を多少引き延ばし、一九五〇年から五七年あたりまでの時期を中心的に取り上げる。次にパネリストの三氏の発題の題目と要旨を挙げる。司会からは、今回取り上げる時代の遠藤の年譜的情報について、シンポジウムの最初に提示する。活発な議論を期待したい。

（北田雄一）

①フランソワーズ・パストル先生の影を追って

國學院大學短期大学非常勤講師 太原正裕

フランソワーズ・パストル先生（以下、パストル先生とする）について、興味を持ったのは、『三田文學』1999年秋号に載った、「妹フランソワーズと遠藤周作」というパストル先生の次姉ジュヌヴィエーブ・パストル氏の手記（以下「手記」とする）を読んだ際に、強い違和感を覚えたからである。時系列、状況などが遠藤周作の日記と一致していないと思われる個所が多々あったからである。そして、2022年にパストル先生の北大時代の教え子である桑原真夫氏の著書『フランソワーズ・パストル』が論創社から出版された。これで、「手記」の謎が解明すると期待したが、結果はますます謎が深まってしまった。しかし獨協大学フランス文化研究第3号「フランソワーズ・パストル先生追悼号」の記述や1964年、パストル先生が日本初来日の時、日本の国内旅行の通訳・随行を務めた坂田善子氏と偶然連絡が取れ、詳細な話を伺えた。また、遠藤周作の秘書を長年務めた塩津登美子氏が当時のことを非常によく記憶しており、パストル先生の人柄を知る一助となった。

以上述べたような研究成果を踏まえ「遠藤周作悪人、パストル先生被害者」観の相対化を試みる。

②遠藤周作と村松剛：同人誌『批評』と日本文化会議を中心に

関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員 神谷光信

遠藤周作が村松剛、服部達とメタフィジック批評を提唱したのは 1955 年のことである。服部は 56 年に自殺してしまうが、仏文学者で文芸評論家の村松剛とは、彼が 94 年に病没するまで親しい友であった。留学から帰国した翌年に当たる 54 年、同人誌『現代評論』の会合で東大仏文科院生だった村松と出会い、当時批評家だった遠藤は意気投合したのである。小説家に転じた遠藤だが、58 年には村松と同人誌『批評』を創刊する。65 年、第二次『批評』には三島由紀夫も参加した。村松と三島は母親同士が幼なじみ、村松の妹・英子は三島演劇に欠かせない俳優になるなど、村松と三島は職業的関係を超えた間柄だった。68 年、保守派知識人団体である日本文化会議設立の際には、遠藤も村松、三島とともに発起人に名を連ねた。70 年に三島が自決すると、遠藤と村松は追悼集会「憂国忌」の発起人になる。村松との関係を探ることで、遠藤周作の保守派知識人としての側面に光を当てたい。

③『海と毒薬』における戦争の記憶と傷痕

金沢大学 飯島洋

『海と毒薬』は、罪の意識の不在や特殊な風土を軸として、神を持たない日本人の問題の観点から読解されてきた。近年では、手記という形式に注目した構造の分析など、新たな視点での研究も進んでいる。本発表では、勝呂が戦後東京の新興住宅地で開業している戦後東京の新興住宅地で開業している医師として冒頭に登場する点に注目する。勝呂は会社員の「私」に過去のことを示唆され、大きな衝撃を受けた様子を見せている。遠藤のフランス留学時におけるレジスタンス運動の汚点の記憶との出会いや、外国文学の読書体験を足掛かりとして、戦争体験をめぐる痛苦の記憶がいかにして抑圧され、またそれは回帰するかという、発表者の継続的な関心に引きつけてこの小説を読み解きたい。

以上